

令和 3 年 4 月 25 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02289

研究課題名(和文) 古代音楽像に写し込まれた理想：思想家ジローラモ・メイの音楽観の全容解明

研究課題名(英文) Girolamo Mei's Aesthetic Ideals reflected on His image of Ancient Music

研究代表者

津上 英輔 (Tsugami, Eske)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：80197657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀イタリアの人文学者ジローラモ・メイは、世紀末のオペラ誕生に間接的に理論的基盤を与えた人物として、音楽史上に名を留めるが、そのような歴史の結果からでなく、彼の学問的営為の本体を見極めるのが、本研究の目的であった。1年の期間延長を含めた4年間の研究から、彼の古代音楽観が、音楽理論書の客観的読解に基づきながらも、自身の理想を投影する面を有しており、一つの音楽美学と言ってよいことが明らかになった。その成果を英語著書Girolamo Mei, A Belated Humanist and Premature Aesthician (2021年2月、勁草書房、学術図書)にまとめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メイはアリストテレス『詩学』の試作手段論とカタルシス概念について、現代から見ても優れた解釈を示している。また、芸術分類論や悲劇上演論において、彼は時代を数百年先駆ける思想を提示している。これは美学史内部に留まらず、広く人類の知的営為の歴史において注目されてよい事実である。それはとりもなおさず、同時代と後代の学者たちが、彼の先駆的思想を取り上げないという選択をしたことを意味するからである。

研究成果の概要(英文)：Girolamo Mei is known in the history of Western music as a person who theoretically stimulated the birth of opera toward the end of the sixteenth century. This project aimed instead at clarifying his thought on ancient music as such. From my four years' analysis of his writings it has been made clear that he sometimes projected his own aesthetic ideals even where he seemed to be objectively talking about ancient music. This result made a part of my English book: Girolamo Mei: A Belated Humanist and Premature Aesthician, published by Keiso Shobo in 2021 with a JSPS grant.

研究分野：美学

キーワード：ジローラモ・メイ アリストテレス 『詩学』 『古代旋法論』

1. 研究開始当初の背景

ジローラモ・メイ(1519-1594)は西洋音楽史上、16世紀末におけるオペラの誕生との関連で記憶されている。すなわちV. ガリレーとG. バルディに彼の伝えた、古代悲劇が全篇歌われたという解釈が、フィレンツェの文人グループCamerata Fiorentinaに共有され、その中から、詩人O. リヌッチーニと音楽家J. ペーリによって1594年のDafne、1600年のL'Euridiceという最初のオペラが制作された。その際、メイがガリレーイらに宛てた1570年代の手紙は、1960年にC. V. パリスカによって公にされたが、他方メイの古代悲劇観の依って立つアリストテレス『詩学』解釈については、研究の手が及んでいなかった。その結果、メイの悲劇上演形態理解が現代のそれと異なることを以て、彼の解釈は誤りと断じられ、したがってそこからオペラ形式が誕生した事態は、「創造的誤解」とされてきた。

そこで私は2015年、『メイのアリストテレス『詩学』解釈とオペラの誕生』(勁草書房、科研費研究成果公開促進費学術図書)を刊行し、上述の手紙に先立って執筆された『古代旋法論』に示された彼の古代悲劇理解が、『詩学』原文の厳密な解釈によること、また、彼の踏まえていた『詩学』原文が今日の標準的テキストと重要な点で異なっていること、すると彼の理解が一つの正当解釈と言えることを証明した。そこから、メイが古代文献に基づきつつ、一つの美的理想を語っている様も垣間見えてきた。

2. 研究の目的

本研究は、メイの古代悲劇上演形態論から、古代音楽論全般へと視野を広げ、特に『古代旋法論』で彼が説明した古代音楽のありさまの中に、音楽に関する彼自身の美的理想がいかに投影されているかの検証を目的とした。その際、古代悲劇を全面音楽劇とする彼の考えにおいて、音楽論と悲劇論は重なるところが多く、彼の悲劇観も併せて考察の対象とした。

3. 研究の方法

本研究は、メイの主著、『古代旋法論』およびP. ヴェットーリ宛を中心とする彼の手紙、さらにメイが依拠したアリストテレス『詩学』およびプトレマイオス『調和論』の分析を主たる方法とした。その際、何よりも厳しく自らに課したのは、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語の正確な読解であり、原文の微細なニュアンスをも汲み取りつつ忠実に理解することを目指した。そこから、人文学者メイのさりげない古典的言説への依拠や論における力点の置き方を読み取ることができた。

4. 研究成果

本研究の成果のうち、次の研究に繋がる新たな視点や課題については後述するとして、目に見えるものは、すべて英語著書Tugami Eske, *Girolamo Mei: A Belated Humanist and Premature Aesthetician*(ジローラモ・メイ: 遅すぎた人文主義者, 早すぎた美学者, 勁草書房, 2021年2月, 科研費研究成果公開促進費学術図書助成, ISBN 978-4-326-80063-6)に盛り込むことができたので、関係する章ごとに内容を要約して、本研究の成果報告に代えることにしたい。各章の題目は次のとおりである。

Chapter 1 Mei's Interpretation of the Ptolemaic Tonos System

Chapter 2 From the Theory of Music to the Aesthetics of Music

Chapter 3 Music's Expressivity and Criticism of Polyphony

Chapter 4 Introducing Alypius' System of Musical Notation

Chapter 5 The Interpretations of the *Poetics* before Mei

Chapter 6 Mei's Interpretation of the *Poetics*: Ancient Tragedy as a Wholly Musical Drama

Chapter 7 Mei and the Recitative Theory of *L'Euridice*

Chapter 8 From the Means of Poetry to a System of the Arts

Chapter 9 Mei's Interpretation of Tragic *Katharsis* as the Culmination of his Aesthetic Thought

Chapter 10 Methodology

Chapter 11 The Epigram *De Phyllide*

このうち、第3, 5, 6章は私の他の著書を、また第1, 2, 7章は本研究以前に書かれた論文

を基にしているが、それらを除く5つの章は、本研究の成果である。

メイによるギリシャ記譜法の紹介を扱う第4章では、彼がアリユーピオスの体系を歴史上初めて西欧の学問世界にもたらした際、その全体を示すのではなく、一部を抜粋して示したために、記譜の仕組みを全面的に解明するには至らなかったことを明らかにした（全面的解明には1841年まで待たなければならない）。

第8章では、メイがヴェットーリに宛てた1560年の手紙の中で、アリストテレス『詩学』の詩作手段論との関係で提示している、芸術分類図表を扱った。彼はその中で、「作術」を「現物を作る術」と「摸倣像を作る術」に分け、後者をさらに現代で言う視覚芸術と言語芸術に分類している。歴史的、理論的考察の結果、前者は絵画と彫刻からなり、後者は詩、音楽（歌）、舞踊（言語を伴う描写的なもの）を含むことが結論づけられた。これは家系図に似た明瞭な形で芸術体系を提示する点で、パトゥ（1746年）に2世紀近く先駆ける画期的な思想であることが明らかになった。

『詩学』のカタルシス概念をメイがいかに解釈しているかを論じる第9章では、その解釈がヒポクラテース・ガレーノスの四体液説に基づく同種療法（homeopathy）の考え方に立つことを突き止めた。すなわち、悲劇が憐れみと恐れのような強い情動を観客に喚起することで、観客の心にわだかまっていた同種の情動を洗い流すという考えである。これは現代心理学で言うKomplexの概念を含めて、同種療法的カタルシス解釈を、ある意味ベルナイス説（1857年）以上に明瞭に語っている点、注目に値するが、それ以上に、悲劇の構造を論じた『詩学』におけるアリストテレスに基づきつつもそれを一歩進め、悲劇の上演効果に光を当てている点、16～17世紀のパロック芸術と通底するものがあり、また悲劇体験を情動という概念によって経験内在的、自律的に説明する点、17世紀に準備され18世紀に開花した美学の先駆けと性格づけることができる。

第10章では、メイが人文主義者の流儀に従って、古典作品の正確な読解、写本記述に厳密に基づくテキストの正統性を重視していること、そして彼のラテン語散文が、きわめて強く古典的文体を志向していることを明らかにした。

最後の第11章では「フュッリスについて」というメイ作として唯一現存する詩作品を取り上げた。メイはこの作品によって、エピグラム詩作という人文主義者の伝統に与しようとしていたことが、考察の結果明らかになった。

以上の考察から、メイが、一方ですでに廃れかけた人文主義の伝統を守りながら、他方で芸術を道徳や教育の手段としてとらえるのではなく、情動喚起の快から自律的に説明する点で、来たるべき美学をはるかに先駆けていると結論づけた。著書全体の題目を『ジローラモ・メイ：遅すぎた人文主義者、早すぎた美学者』とする所以である。

ところで、本書執筆の過程で、『古代旋法論』のラテン語を英語に訳す経験を積み、全体を英訳できる自信を持つことができた。2020年度からの科研費課題（基盤（C）課題番号20K00157）で英訳を実行しつつある。詳細な注釈を含むその成果を書物として出版し、『古代旋法論』を世界の学界の共有材とする計画である。また、上述のとおり、本英語著書第10章において『古代旋法論』のラテン語文体の考察を行なったが、その際、文体の古典性を測るもう一つの重要な尺度として、従属節における接続法／直説法の用法が浮かび上がった。複雑な構文に満ちたこの書物におけるその用例は1000を超えらると思われ、分析結果を今回の刊行に間に合わせることはできなかったが、英訳書には盛り込むことができると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 津上英輔	4. 巻 22
2. 論文標題 メイ作エピグラム「フェッリスについて」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『美学美術史論集』	6. 最初と最後の頁 (1)-(23)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津上英輔	4. 巻 26
2. 論文標題 メイ美学思想の集大成としてのカタルシス解釈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 成城美学美術史	6. 最初と最後の頁 19-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津上英輔	4. 巻 252
2. 論文標題 古代理論を近代思想に仕立て直す—ジローラモ・メイの芸術体系論—	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 13,24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津上英輔	4. 巻 252
2. 論文標題 古代理論を近代思想に仕立て直す—ジローラモ・メイの芸術体系論—	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 TSUGAMI Eske
2. 発表標題 Aesthetics of Tragic Katharsis: Girolamo Mei 's Interpretation
3. 学会等名 ICA 2019 , Belgrad (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津上英輔
2. 発表標題 詩作する人文主義者メイ：エピグラム「フュッリスについて」の分析から
3. 学会等名 美学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 津上英輔
2. 発表標題 平和と美学：感性は戦争に加担する
3. 学会等名 成城大学美学美術史学会第6回例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Tugami Eske	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 221
3. 書名 Girolamo Mei: A Belated Humanist and Premature Aesthician	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------